ラドヤード・キプリング

19　正直者トマスの最後の唄

王は司祭を呼べ　酒盃を持てと命じた
　王自身は拍車と剣を整えさせた
正直者トマスを　礼帯の騎士に叙するため
　トマスの創った唄を称えんがため

王と共ぞろえは　あらゆるところ　5
　丘や野のいたるところに　トマスをさがした
ついに見つけたのは　白い山査子(さんざし)が咲くところ
　仙界の入り口を護るところ

地には藺草(いぐさ)　天には青空
　人の目はくらまされ　見えないのだ　10
丘辺に食(は)む牛たちが
　実は仙女王たちの仮の姿とは

王はトマスに言った　「もう唄はやめよ
　「唄はやめて　覚悟せよ
「誓いを立て　武具をつけよ　15
　「そちを礼帯の騎士に叙するゆえ

「そちに駿馬をさずけよう
　「紋章　拍車　小姓　それに従者をつけて
「居城　領地　永久占有権　裁判権
　「領地の広さはそちの望むまま」　20

トマスは抱えた竪琴の上から微笑み
　雲一つ無い空を見上げた
気ままな風に吹かれて
　薊(あざみ)の綿毛が漂っていた

「私は他(ほか)の場所で誓いを立てた　25
　「それは　それは　厳しい誓いだった
「果てしない夜の間　ずっと武器をかまえていた
　「そこは百人のも武士(もののふ)も逃げ出すような場所だった

「私の槍は　燃えさかる炎で生まれた打物(うちもの)
　「私の盾は凍った月光をあびて生まれた業物(わざもの)　30
「そして私の拍車は中津国(なかつくに)で得しもの
　「そこは地底千尋(ちひろ)の深みにある国

「駿馬などもらって　何になる
　「金ピカの剣(つるぎ)をもらって　何になる
「仙界の優しい民の和をかき乱し　35
　「その国のわが同胞(はらから)に諍(いさか)いを起こすだけ

「紋章や礼帯をもらって　何になる
　「居城　領地　永久所有権　禄高　それがどうした
「小姓に従者　そんなものをもらってどうする
　「すでに一国の王たる身分の　この私が　40

「私は　東に西に　使者を送れる
　「思うまま遠くに送れる
「夜明け黄昏　時を選ばず　激しい雨の最中(さなか)でも
　「やがて　私の使者は　戻ってくる

「苦しみに呻く　陸(くが)の知らせを携え　45
　「戦で沸き返る　海の知らせを携え
「神　精霊　聖体(キリスト)の言葉と
　「その三者の間(はざま)に苦悩する人間の言葉を携えて」

王はむっと　唇を噛み
　手で膝を打ち　こう言った　50
「正直者トマスよ　まことにそちは
　「ずけずけと物言う奴じゃ

「わしの誇りにかけて
　「伯爵を三人ずつ
「そちの馬の前と後ろに　走らせよう　55
　「わしの倅(せがれ)どもにも　仕えさせよう」

「あなたの足腰ひよわな伯爵など
　「王子たちなどごめんこうむる
「功名を　勝ち得るその前に

「お暇くださいと言うのに決まっている　60

「市(いち)の立つ十字街路で　僧侶たちと唄うとき
　「お世辞たっぷり　持ち上げてやる
「人気(ひとけ)ない街道で　犬たちと戯れるとき
　「嬉々として　童心に帰る

「本物の金貨をくれる人もおれば　65
　「銀貨のときもある
「小麦のつまった袋を差し出す人もいる
　「貧しい者の定めゆえ

「何枚かの金貨をもらって　唄いもすれば
　「同じ唄を　銀貨で唄うこともある　70
「小麦の袋をくれた人には　とびきり良い唄を唄うのだ
　「貧しい人が恵んでくれた　その礼に」

王は銀貨を一枚　投げ与えた
　スコットランドの四ペンス銀貨を
「貧者に恵んでやるような　小銭だが　75
　「それでも　そちは唄ってくれるか」

「幼い子らに唄うとき
　「子らは私のそばに寄ってくる
「なのにあなたは　何様のおつもりか
　「みな立って聴くのに　あなただけ馬の上とは」　80

「駿馬とやらから　降りなさい
　「まことえらそうな　物言いをなさる
「三曲唄ってさしあげよう
　「最後まで聴けるなら　あなたの騎士になってあげよう

王は駿馬から降り　85
　岩を背に寄りかかった
「さあ　覚悟はよろしいか
　「胸の骨が砕け　心の臓(しんぞう)を引きちぎられても知らぬこと」

正直者トマスは竪琴を奏でた
　嘘がつけぬ魔法の竪琴　90

誇り高き王が聴いた最初の一言で
　王の目から塩辛い涙が流れた

「ああ　わしにはとうに失った　恋が見える
　「かなえられるあてもない望みにすがる
「人知れずしでかした　恥知らずの愚行が　95
　「今　あまたの毒蛇となって　わが身をせめる

「真昼というのに太陽が隠れてしまった　真昼というのに
　「死の恐怖が　わしに襲いかかる
「正直者トマスよ　そちの衣の下に隠してくれ
　「頼む　わしはまだ死にたくはない」　100

地には蘭草（いぐさ）　天には青空
　開けた野に　さ走（ばし）る流れ
ヒースの茂みと　堤と城壁にギラギラと
　真昼の太陽が　毒蛇の群れを温める

正直者トマスは言った　「落ち着かれよ　105
　「神の裁きは　すべてが終わったあとのこと
「もうすこし良い唄を唄ってあげよう
　「あなたに懸けた暗雲を払ってさしあげよう」

正直者トマスが竪琴を奏でると
　琴の音は紡ぎ車のごとく唸り　軍馬のごとく疾駆した　110
トマスが唄った　最初の一言は
　王に俊馬の手綱を取らせ　太刀を握らせた

「ああ 兵たちの足音が聞こえる
　「鎧（よろい）や槍先に反射する日の光が見える
「わしは羊歯（しだ）の茂みから　矢を放つ　115
　「その矢は地面をかすめ　ヒューと鳴る

「軍旗を前線に進めよ
　「下知せよ　勇敢なる騎士に　拍車を当てて駒を進めよと
「空の鳶（とび）に　恐ろしい合戦（かっせん）の様を見せてやれ
　「これまでで一番激しい国境（くにざかい）での合戦を」　120

地には蘭草（いぐさ）　天には青空

風にそよぐ草　雲一つ無い虚空(こくう)
気ままに吹く風に舞う　若鷹(わかたか)は
鵲(かささぎ) を狙って　急降下

正直者トマスは　竪琴を抱えて　長嘆息　125
唄を真ん中の弦に合わせて唄った
最後の唄の最初の一言で
王は失った昔の青春を思い出した

「いまはもう　わしは先王の跡継ぎ　だから
恋はいつでも　思いのまま　130
下々の者と連れ立って　遊ぶことも
「鹿を追って　馬で駆けるのも自由

「猟犬たちは　死にものぐるいに吠え立て
「牡鹿は　川の向こうにうずくまる
「恋人は　館の窓辺で　わしを待ち　135
「帰れば　わしの手を洗ってくれた

「あんな暮らしに　満ち足りていた
「（ああ　わしは　恋人の眼を見てしまった）
「あいつはエデンの園でアダムの奴と立ち
「快楽の森に走りこんでしまったのだ」　140

雲一つ無い空　風にそよぐ草
さ走(ばし)る川　気ままな風
林の空き地に　退路を断たれ
赤鹿が　雌鹿(めじか)を待って振り返る

正直者トマスは　竪琴を置き　145
王の鞍のそばで　深々とお辞儀をし
鐙(あぶみ) を取り　手綱を押さえ
王を駿馬に乗せた

トマスは言った「眠っておいでか　起きておいでか
「そんなに静かに長く考えに沈んでおられるとは　150
「眠っておいでか　起きておいでか　永久の眠りにつくまでは
「私の唄をお忘れにはなるまい

「私は　太陽から幻影を作り
　「あなたの眼前に見せ　泣かせてみせた
「足元の大地を修羅の巷に変え　155
　「頭上の空を曇らせて見せた

「私はあなたを　神の高みにまであげ
　「心の臓(しんぞう)を三つに引き裂く目にも遭わせ
「地獄の奥底までも突き落としてやった
　「それでもまだ　取り立てる　おつもりか　私を　騎士などに」　160

（桝井幹生訳）